

新潟県における温泉開発の歴史

白石 秀一*

1 はじめに

新潟県は日本でも有数の温泉県で、温泉地の数では国内第4位（145か所）、温泉の自噴量では全国第8位、温泉宿泊箇所数では第6位（688か所）となっている。ちなみに、温泉地数全国第1位は北海道、温泉湧出量の第1位は大分県、宿泊施設数の第1位は静岡県である（平成14年3月：環境省自然環境局自然環境整備課調べ）。このように、新潟県が温泉大県となったのはいつからのことであろうか？

筆者はこれまで多くの温泉開発に携わってきた。その中では各温泉地の履歴を調べる必要があり、温泉の歴史に関する多くの資料が手元に集まってきた。また、新潟県内、各温泉の歴史についても興味を抱き、いろいろな資料を集めてきた。このあたりでそれらを整理しておくことも必要ではないかと考え、このような拙文をしたためてみた。ある人に言わせると、歴史の講釈をするようになると、もうその人も終わりだということであるが、そろそろ終わりにしても良いかなと考え、このようなものを書き上げてみた。同様な内容の著作については、恩師の島津先生がすでに上奏されており、それに対抗するようで、ちょっと恥ずかしい点もあるのだが、より多くの記録を取り上げているつもりなので、今後の参考にしていただければ幸いである。

2 新潟県でもっとも古い温泉はどこか？

温泉の記録が文書として残っているのは江戸時代、それも、中後期がもっとも古くなる。ところが温泉の起原についての言い伝えとなると、それよりかなり古くなるものが多い。それらは歴史的に証明されたものではない。ただし、古くから知られた温泉という意味では、それなりの意義をもつものではなかろうか。

全国的に見ると、「弘法大師が発見した」といわれている温泉は数が多い。弘法大師（空海）は平安時代の僧侶で遣唐使として唐にわたり、帰国後、高野山で真言宗を開いた、えらいお坊さんである。この人は全国を駆け回ったらしく、全国あちらこちらに、この人の足跡が残っており、彼が発見したり、掘り当てた井戸や温泉も全国いたるところにある（掘ったといっても、杖や独鈷をついただけのことも多い）。しかし、実際に全国を回ったのは、彼の教えを広めた弟子達であったのではなかろうか。

新潟県にも弘法大師が発見したという温泉が、なんと3箇所も存在する。出湯温泉・貝屋温泉（新発田市）と妙高の関温泉がそれである。このなかで、出湯温泉は大同四年（809年）の発見と、具体的な年代まで伝えられている。この年代が、新潟県の温泉の年代でもっとも古く、出湯温泉が新潟県でもっとも古い温泉とって良いのかも知れない。また、妙高山周辺には弘法大師が発見した温泉が数多くあり、妙高48湯と呼ばれている。

そのほかに古い温泉としては、平安時代に発見されたと言われている弥彦観音寺温泉が

*株式会社日さく

ある。成願寺温泉は平安時代の中期に決められた官位である「北面の武士」の娘、花子が発見したといわれている。北面の武士の娘にしては、名前が現代的で、かなり「うそくさい」感じがする。

また、鎌倉時代になると、関川村の湯沢温泉が文治元年（1185年）、佐渡の湯上温泉は承久三年（1221年）の発見といわれている。湯上温泉は佐渡に流された順徳上皇が鷲の飛び立つのを見て発見したといわれている。室町時代のはじめ、建武二年（1335年）に荒木正高という武士により村杉温泉が発見されている。戦国時代には栃尾の大野鉾泉、蓮華温泉、越後湯沢温泉が発見されたことになっている。栃尾の大野鉾泉は長尾影虎（後の上杉謙信）が戦で傷ついた部下の治療に使ったとされているし、蓮華温泉は上杉謙信が蓮華金山の開発をおこなった時に発見されたといわれている。

2 江戸時代の温泉記録

江戸時代の新潟県の温泉について知ることができる、重要な文献をいくつか見ることができた。

江戸時代中期の宝暦6年（1756年）に、寺泊の医師丸山元純が著した「越後名寄」と、文政13年（1830年）に、長岡の医師、小林英庵が著した「越後薬泉」である。そのなかでは、越後全域の温泉が紹介されている。それぞれの文献で取り上げられている温泉は、「越後名寄」が16箇所、「越後薬泉」では52箇所ある（表. 1）。

そのほか、各地の温泉に残されている古文書などで、この時代の温泉の様子を知ることができる。

「越後名寄」を著した丸山元純は、元長岡藩に仕えていたが、官仕えの煩わしさから藩を去り、寺泊で医者を開業するかたわら越後各地を歩き回った。各地の風物を全31巻にまとめたものが「越後名寄」である。そのなかの巻之九には、「水・温泉・居風呂・火類」がまとめられている。「水」の部には各地の湧水が、「火類」のなかには焼山などの火山のほか、草生水、天然ガス（陰火）の記述がある。各温泉については、位置や薬効・色や匂いなどの特徴が書かれている。また、温泉宿の状況や歴史も書かれている。さらに、温度の低い鉾泉を沸かして宿をいとなんでいるものを「居風呂湯」として区分している。「居風呂湯」には、村杉・岩室・観音寺・田上・鎌沢（古志郡）・与板の温泉があるとされている。

「越後名寄」より約100年後に出版された「越後薬泉」では、温泉御数が3倍以上に増えている。これは、実際に温泉数が増えたのではなく、丸山元純より小林英庵の方が、よりくまなく越後各地を歩いたことが原因と考える。「越後薬泉」の中では、各温泉への行程や温泉の特徴について詳しく記述されているばかりでなく、温度により「冷泉、冷温泉、微温泉、温泉、熱泉、極熱泉」に区分している。ただし、その温度についてはわからない。極熱泉には松之山温泉が、熱泉には妙高関温泉・松之山温泉・大湯温泉・雲母温泉が、温泉には梶山温泉・出湯温泉・関川湯沢温泉が、冷温泉には梶山新湯が、微温泉には栃尾俣温泉が区分されている。これから温度を推定してみたい。

さらに、泉質については「蘇枋紙」・「鴨跡紙」という試験紙らしきものや、「碧酸加里」という試薬を用いて成分分析を行っており、中和塩・亜兒加里塩の量比について記述されている。また、鉄泉・明礬泉などの聞きなれた名称もみられる。おそらく、日本における温泉化学についてのもっとも古い文献の一つだと思われる。

松之山温泉や大湯温泉・越後湯沢温泉・貝掛温泉は、数日連続して入浴すると湯アタリをおこし肌がただれると書かれている。当時の温泉は現在のものよりもかなり濃かった可能性がある（今でもナマの源泉へ入浴すれば、湯アタリをおこすのかもしれない）。

江戸時代も中期になると、社会が安定し、諸国間の人間の往来が盛んになってくる。このような背景のもとに、「越後薬泉」のような著作ができあがったものと思われる。全国的にも多く旅行案内や紀行文が出版されている。十返舎一九の「東海道中膝栗毛」（享和元年：1801年）などは純粋な紀行文とはいえませんが、その代表的なものである。越後についての旅行案内や紀行文については、「新編会津風土記」「越後略風土記」というようなものがあるようだが、残念ながら、まだお目にかかってはいない。

越後の珍しい品々を紹介した「北越奇談」（文化9年：1812年）のなかには、著者の崑崙橋茂世が大湯温泉につかりながら付近の山々を歩きまわり、奇石を求めたと書かれている（巻之三）。

江戸時代も後半になると、多くの商人が各地の物産を買い集めたり、販売するために諸国を巡ることが頻繁になってくる。江戸時代末に出版された、商人専用の旅行ガイドブックと言えるような文書が、県立歴史博物館と県立図書館に所蔵されている。県立歴史博物館の主任研究員渡部浩二さんの好意で、その実物を閲覧させていただけた。この文書は、安政二年（1855年）に発行された「東講商人鑑」である。この冊子は江戸湯島天神表門通の大城屋良助が発起人となり設立した、全国的な旅館組合である「東講」の旅行案内書である。そのなかには、東日本各地の「東講」指定の宿、商店・問屋・名所旧跡が絵地図とともにえがかれている。

越後については村上から直江津・高田まで30頁（B5版を横にした程度の大きさで、袋とじなので1丁、2丁と数え、それぞれの丁に裏表がある。つまり30ページは15丁）にわたり案内されている。

そのなかに、湯田上温泉・岩室温泉（34丁裏）、大湯温泉・栃尾又温泉・越後湯沢温泉（37丁表）が絵地図入りでのっている。湯田上温泉の部分には5軒の温泉宿が、岩室温泉には、「小杉や、小角や、油や、松屋、小松屋、かじや」の6軒の温泉宿が書かれている。いずれも「東講」の指定旅館になっている。「大湯温泉之図」には、「いづみや、玉屋、東栄や、湯本や」の4軒の温泉宿が書かれているし、「栃尾俣温泉之図」には湯小屋がえがかれている。

県立図書館に所蔵されているものは、県立歴史博物館のものより新しい版と思われ、若干内容が変わっている。たとえば、岩室温泉が削除されて空白になっていたり、栃尾又温

泉が大きく描かれるとともに、同じサイズで越後湯沢温泉が書き加えられている。栃尾又温泉の図には男湯と女湯が分かれた湯屋が描かれているなど、歴史博物館のものとだいぶ雰囲気が変わっている。

江戸時代の温泉開発で忘れてはいけないことが、赤倉温泉の開発であろう。赤倉温泉は妙高火山の北地獄谷に湧き出す温泉を、延々と引湯してきている。その温泉の権利は、妙高山を御神体と崇める宝蔵院（関山権現）のものであった。安永7年（1778年）に長野県牟礼村の人間から、天明元年（1781年）には地元の庄屋たちから湯治場の開湯の願いが出された。しかし、宝蔵院は俗人が神聖な妙高山に入るのを嫌ったこと、享保12年（1727年）にすでに開湯していた関温泉から入る冥加金の減ることをきらい、許可を出さなかった。その後、享和3年（1803年）に地元の庄屋たちが高田藩の後押しを得て、再度開湯の願いを出した。高田藩がくり返し交渉を続けた結果、文化11年（1814年）になりようやく、宝蔵院から開湯の許可を得ることができた。その時の保障料は1100両であった。この間に、なんと6年を要している。赤倉温泉の工事が始まったのはさらに2年後の文化13年（1816年）である。文化13年9月には共同浴場の湯船2箇所が完成し、赤倉温泉がはじまった。

3 明治時代から第二次世界大戦前までの温泉開発

明治時代から第二次世界大戦終了まで、温泉の管轄は警察が行っていた。これは、温泉が遊园地であるという事からであろうか。この時代の、新潟県下の温泉地の変遷については、なかなか資料がそろわない。そのようななかで、明治19年、内務省衛生局の監修により「日本鉱泉誌」上下巻が上奏されている。これは温泉を国民の健康に役立てようという明治新政府の意気込みが感じられるもので、全国の温泉について温度と泉質ばかりでなく、年間の利用者数や、起原まで調べてある。その中の新潟県の部には、表. 1に示す58の温泉が掲載されている。江戸時代の「越後薬泉」に比べ、温泉地の数はあまり変わっていないが、箇所はだいぶ異なっている。とくに、「鉱泉」といわれるものの変化がおおきい。「鉱泉」は地表にわずかに湧き出した、溶存成分が多い水を沸かしていたものであろうから、その盛衰が激しいのかもしれない。

大正時代から昭和初期にかけては、旅行をする人が増えてきたらしく、鉄道省はじめいろいろなところから、旅行案内が出されている（島津:2001）。そのような一つに、昭和11年発行の「温泉の越後」という旅行案内が手元にある。そこでは信越線・上越線・磐越線などの鉄道路線に沿って、80の温泉を紹介している。明治19年の「日本の鉱泉誌」に比べ、20箇所ほど温泉地が増えている。この間で増えている温泉のなかには、瀬波温泉・月岡温泉・新津鉱泉・三川温泉・麒麟山温泉（当時は湯之浦温泉と呼んでいた）などがある。

この間の、温泉地の増加に大きな役割を果たしたのは、県内各地で行われた石油掘削である。新潟県における石油の掘削は江戸時代から手掘りで行われていた。手掘りの井戸では深さ数10mが限界である。ところが、明治23年に有限責任日本石油会社（現在の日本石油）が寺泊町の尼瀬で、網掘り式の機械掘削を開始した。さらに、明治45年にはロータリー

式のボーリングマシンを導入し、県内各地で掘削が行われた。これらの掘削機械の導入により、石油井戸の深さは500mをこえるようになった。

ところが、石油が出ずに温泉を掘り当ててしまったということが多かった。そのなかでも有名なものが、瀬波温泉と月岡温泉である。

瀬波温泉は明治37年4月に、「三島や旅館」の先代で、旧瀬波町長をつとめた八子正一さんが石油掘削を行ったところ、油が出ずに、熱湯が湧きだした。それを使って温泉旅館を始めたことが、そのおこりである。

また、月岡温泉は大正6年に宝田石油株式会社の本間周三郎が石油を掘削するつもりが、深さ250mで温泉を掘りあててしまったのが始まりである。本間は石油をあきらめ、温泉を始めた。本間が石油掘削の工夫であった青木小一郎に始めさせた温泉宿が「青木屋」である。

「青木屋」の前には「月岡温泉元湯発祥の地」という石碑が建っている。これをみて、鉱区権を保有していた今井慶作が、本間の掘り当てたお湯を引いて始めたのが「月岡館」であり、新しい井戸を掘削して始めたのが共同湯「旭の湯」である（豊浦町：1987）。

このほか、石油井戸が転じて温泉になったものとしては、高坪鉱泉（明治10年）・兎口温泉（明治39年）・越乃湯（与板町、明治30年代）・越後東山温泉（明治30年頃）・荷頃鉱泉（明治時代）・三島谷温泉（大正中期）・寺泊温泉（年友鉱泉、大正12年）・勝見鉱泉（大正時代）・松ヶ峰温泉（昭和14年）・柏崎温泉（第二次大戦中）・越後俵山温泉（第二次世界大戦末期）などがある（朝日新聞新潟支社：1988など）。

石油とは別に、この時代にリゾート地としての温泉開発が行われたのが妙高地区である。妙高地区では明治26年（1893年）に信越本線直江津・上野間の全線が開通した。これと同時に従来の湯治客が激減した。このため、それを補う方法として、県外客を誘致することに努め、皇族や文化人・県知事などが訪れるようになった。明治32年には尾崎紅葉が赤倉に滞在している。文化人の中でもっとも赤倉を愛した人は、日本美術の理解者である岡倉天心であろう。天津が初めて赤倉を訪れたのは明治39年（1906年）である。その後彼は赤倉に別荘を建てた。赤倉山荘と呼ばれる別荘には横山大観や下村観山などが訪ねてきたとのことである。その後は、別荘地の開発が進み赤倉温泉は栄えていった。鉄道の開通により湯治客が減少し、苦境に立った赤倉温泉を救ったのは、鉄道の町に近い田口地区から持ち掛けられた分湯の話である。田口地区が赤倉の温泉を分湯する権利を、当時の金額で、6000円で買い取り、現在の妙高温泉が明治36年から営業を始めた（筆者の両親は現在でも妙高温泉のことを分湯：ブントーと呼んでいる）。さらに、この分湯事業を手がけていた「赤倉温泉分湯株式会社」が南地獄谷の温泉の権利を得て、妙高温泉土地株式会社と社名をあらため、大正6年から池の平温泉の開発を始めた。

4 第二次世界大戦後の温泉開発

第二次世界大戦が終了し、占領軍の手で民主的な行政組織が導入されるとともに、温泉の管轄は、内務省の警察から厚生省の保健所に移管された。それとともに、昭和23年に温

泉法が制定され、温泉が法的に保護されるとともに、行政による温泉の管理が開始された。温泉法の中で、温泉掘削にあたっては温泉審議会の許可が必要となっており、掘削の結果は都道府県知事に届け出るようになってきている。また、温泉の使用量等についても報告が義務づけられている。それが統計として公表されている。昭和32年以降の温泉地と源泉数の変化をグラフに示したものが図. 1である。昭和37年依然と38年以降は統計の方法が異なっているためか、記録が連続しない。このためグラフには昭和38年以降のみを示した。

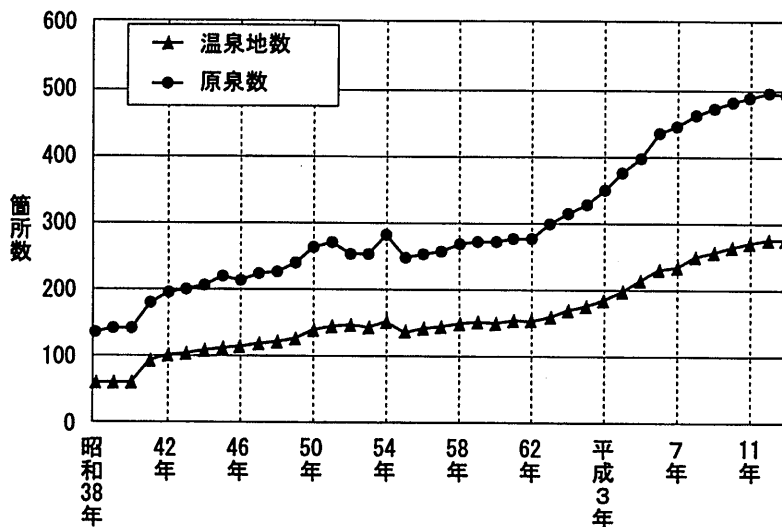


図. 1 昭和38年以降の温泉地数・源泉数の変化

戦後しばらくの間は、温泉や旅行などという言葉は聞かれなかったはずである。全国のおもだった温泉地は駐留米軍の保養施設として接收されている。新潟県でも赤倉観光ホテルが接收されている。ところが、戦後のエネルギー不足を解消する方法として、各地で石油開発や天然ガス開発が盛んに行われ、石油やガスの代わりに温泉がでた例がいくつも知られている。そのような温泉としては、長岡三ツ郷屋温泉（現在廃業）、鶴の浜温泉（昭和33年）、津南小下里温泉（昭和34年）、六日町温泉（昭和32年）などがある。六日町温泉は六日町盆地の地下に水溶性天然ガスが存在するのではないかという期待のもとに、試掘を行っていたところ、温泉が噴き出したのである。このような温泉の発見により昭和38年（1963年）以降、温泉地・源泉数ともに毎年わずかながら増加している。

昭和42年（1967年）から昭和51年（1976年）の頃に、増加件数がふえている。この時期は、東京オリンピックを成功させた勢いで、経済が活気を帯びた時期でもある。庶民も経済的なゆとりができ、余暇を利用した温泉旅行が一般化し、各温泉地はいっせいに設備増強を図った。そのため湯量の不足が発生し、新規井戸の掘削が行われた。場合によっては温泉の枯渇もあったかもしれない。それを裏付けるように、この時期には温泉地数が毎年3～4箇所程度しか増えていないのに対し、源泉数は15～24本づつ増えている。つまり、従来あった温泉地での掘り替えや新規掘削が多かったことを示している。

昭和52年（1982年）に新潟県により「新潟県の温泉」という冊子が発行されている。そ

こには県下のすべての源泉について所在地・所有者・湧出状況・温度・量・利用状況・掘削深度・泉質が記載されている。そこに載っている温泉地は150箇所ある(表. 1)。昭和11年の「温泉の越後」に比べ1.5倍に増加している。これは、記録の質が異なることによる増加分もあるとは思いますが、実際はかなり増加したことは事実であろう。昭和52年以降、新潟県によるこの手の資料の開示はない。これは「温泉のデータが個人情報に属するものであるから、公表できない」という考えに基づくものようであるが、温泉のもつ公共性を考慮すると、非常に残念なことである。

温泉数がもっとも増えたのは、平成元年(1989年)から平成12年(2000年)の間である。この時期には温泉地・源泉数ともに著しい増加を示す。この時期、温泉地数は毎年6~8箇所、源泉数も7~8箇所程度、増加した。つまり、まったく新しい場所に新しい温泉が掘削されていたことになる。

この時期は記憶にも新しい、いわゆるバブルの時代である。中曽根内閣時代の昭和62年に、「大規模リゾート法」なるものが制定され、日本中がリゾートに酔った。各地でリゾート開発なるものが行われ、リゾートには温泉がつき物と、積極的に温泉が掘削された。その追い討ちをかけたのが、昭和63年(1988年)に竹下内閣により全国各市町村にばらまかれた「ふるさと創生1億円事業」の1億円である。このお金で温泉井戸を掘削した市町村は極めて多い。「地域活性センター」の調べ(1993年)によると、全国で252の市町村が温泉の掘削を行っている。そのうち215の自治体が温泉を掘りあてている。ただし、その量や温度からみて、温泉施設への利用が可能なものであるか、という点については、はなはだ疑問の点が多い。

この時代には温泉の掘削費も高騰し、10万円/mが普通の時代になった。温泉掘削ばかりでなく、温泉調査にも法外のお金が払われるようになり、調査で1,000万円というのが普通になってしまい、ヘリコプターによる放射能探査などという超理論的な調査まで行われるようになった。

そんな、この時代のエピソードを紹介しておこう。ある開発業者に、地表地質踏査を中心とした数百万円(たしか200万円前後)の温泉調査の見積もりをもってうかがったところ、「そんな安い金でできるような調査では信用がおけない、もっと高い調査の計画を持ってきてくれ。」と言われ、あわてていろいろな物理探査を盛り込んだ調査を提案した。日本中が狂っていた時代である。

「ふるさと創生1億円」資金で温泉を掘削した市町村は、新潟県内でも極めて多い。北から順にあげていけば、山北町・粟島浦村・朝日村・五泉市・小須戸町・田上町・下田村・柏崎市・高柳町・柿崎町・吉川町・松代町・安塚町・板倉町・新井市・能生町・相川町・金井町・畑野町・小木町などがそうではないかと思う。そのほか、民間の開発業者が掘削した温泉井戸もかなりある。自治体が掘削した温泉では立派な施設が作られている。その

中には、出ているお湯の量と不釣り合いなものまで見られる。民間が開発した温泉は、ゴルフ場やリゾートホテル、マンションに利用されているものが多く、一般者が利用できないようになっているものも多い。

これらの温泉の多くは、従来の温泉とは異なり、有望な熱源がある地域での温泉開発ではなく、地下増温率により深部の地下水が温められ、温泉法に適用する温度になっている、「深層温水」を開発するものが極めて多かった。

平成15年に、新潟県のホームページにのっている温泉数（温泉の名前のみが掲載されている）は、263箇所となっている。昭和57年の「新潟県の温泉」から、わずか21年の間に温泉数は1.7倍以上になっている。そのなかでも、最も増えているのが塩沢町（6箇所→11箇所 1.8倍）、湯沢町（4箇所→15箇所 3.7倍）である。その当時は「東京都湯沢町」とまで呼ばれた、異常な開発の状況がこの数字にも表れている。それに次ぐ地区として、妙高村（2箇所→6箇所 3倍）がある。妙高村では関川の東側での開発に伴い温泉が増加している。

5 今後の温泉開発の目指すべき方向

このように、新潟県では石油の開発と共に温泉が増えてきた。それらは「非火山性温泉」とよばれるもので、地下深部に起原不明の熱源が存在する温泉が多かった。ところが、近年ではそれに加え、地下増温率に期待し、地下深部にある、あたたまった地下水（深層温水）を開発する温泉が急激に増えている。それにともない、温泉の掘削深度も昭和50年代には500～600m程度であったものが、昭和60年代から平成のはじめには1000m程度になり、現在は1000～1500mになっている。深層温水の開発が盛んな関東では2000～3000mという井戸も多くなってきている。

新潟県のデータにもこのことは明瞭に現れている（図. 3）。昭和30年代の平均掘削許可深度は200m程度であったのに対し、40～50年代では600m程度になり、バブル景気以降は一挙に1200mに延びている。

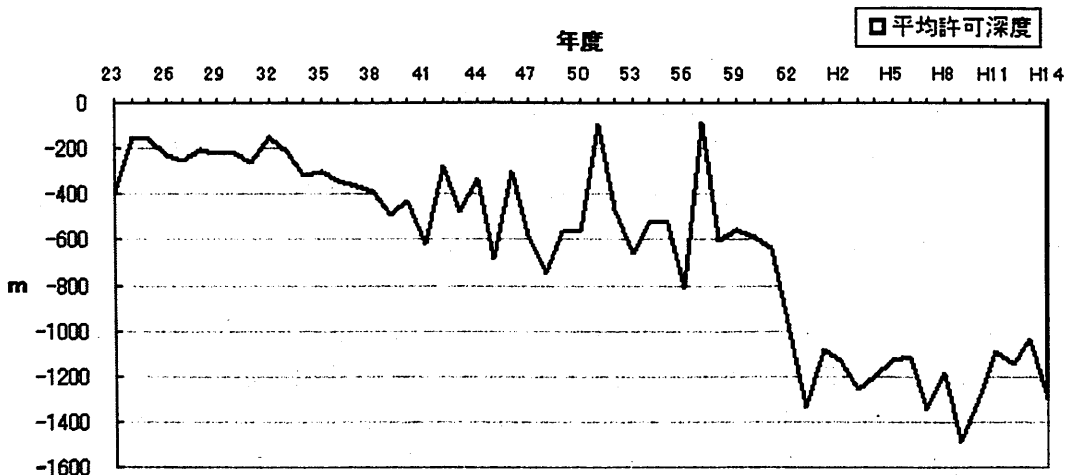


図. 3 平均掘削許可深度の推移（新潟県ホームページより）

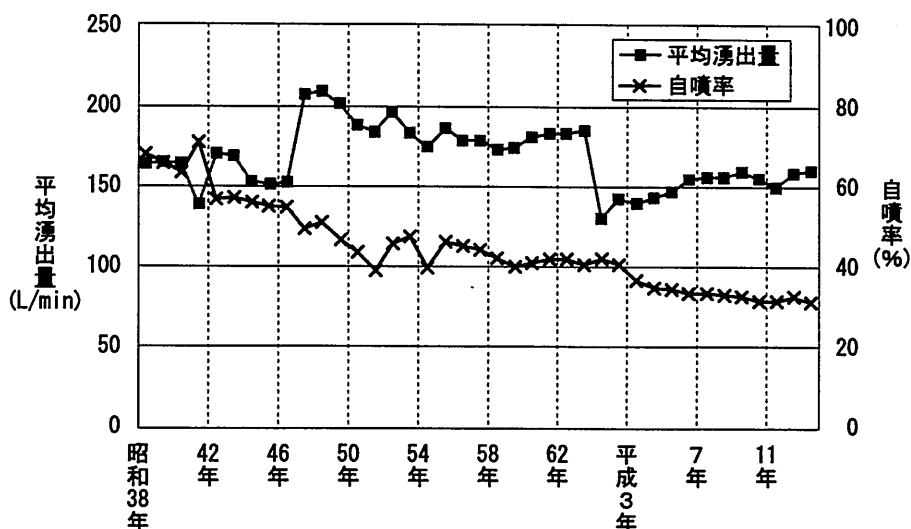


図. 2 自噴率と平均湧出量の経年変化

図. 2には新潟県の統計資料をもとに温泉の平均湧出量(新潟県の総温泉湧出量を源泉数で除した値)と自噴率(自噴源泉数を総源泉数で除した値)の経年変化を示した。

この図では自噴率はともに、毎年しだいに低下している。ただし、平成3年頃からは平均湧出量は増加している。これは新しく掘られた井戸が数値を押し上げていると考えられ、従前からの井戸の平均湧出量は、減少の傾向にあるものと思われる。新しく掘削される温泉は、掘削深度が深くなっているため、当然自噴はしにくくなり、自噴率低下の一つの原因となっている。しかし、自噴率の低下はそればかりではなく、それまで自噴していた温泉の自噴がとまった例も多く含まれている可能性がある。最近では新発田の「あやめの湯」で、自噴が停止し、一時休業していた。

温泉源の衰退は、掘削により得られた深層温水ばかりではなく、地下からの熱が供給されて形成されている「いわゆる温泉」(熱い温泉……土井:2003、よい温泉……露木:1992)でもみられている。あちこちの温泉で「最近お湯がぬるくなった」とか、「温泉の湧出量が減ってきた」という話は良く聞く。

温泉は限りある地下資源である。我々、温泉開発業者も単に新規掘削に走るばかりではなく、温泉を効果的に利用する方法を考え出し、それを普及させていくことがこれから求められるのではないかと、近年切実に思っている。

謝辞

この報告をまとめるに至った大きな原因の一つに、新潟県立歴史博物館の渡部主任研究員から、「東講商人鑑」の実物を見せていただいたことにある。そのおり、「越後薬泉」についても、出典を教えていただいた。さらに、「越後名寄」などの文献を提供していただいた。また、写真の掲載も快く許可いただいた。これらの点について、文末を借りてお礼を申し上げたい。

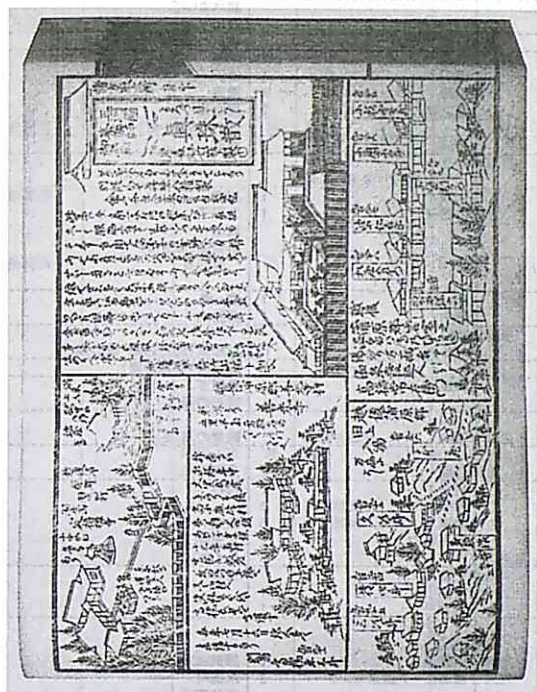
参考文献

- 朝日新聞新潟支局 (1988) 越後の湯, 青冬社.
小林英庵 (1830) 越後薬泉, 越佐叢書 第5巻, 野島出版
崑崙橋茂世 (1978) 北越奇談, 野島出版.
源川公章 (1936) 温泉の越後, 萬松堂書店.
内務省衛生局編纂 (1886) 日本鉱泉誌, 上巻 pp.420-480.
新潟県 (1982) 新潟県の温泉, 新潟県.
島津光夫 (2001) 新潟温泉風土記, 野島出版.
土井和己 (2002) 日本の熱い温泉と地質, フジ・テクノシステム.
露木利貞 (1992) 九州における温泉と地質—鹿児島県の温泉を中心として—
露木利貞教授退官記念会.
渡部浩二 (2000) 館所蔵の『東講商人鑑』について—新潟県立図書館本との比較—
新潟県立歴史博物館研究紀要, Vol.1 pp.31-77.

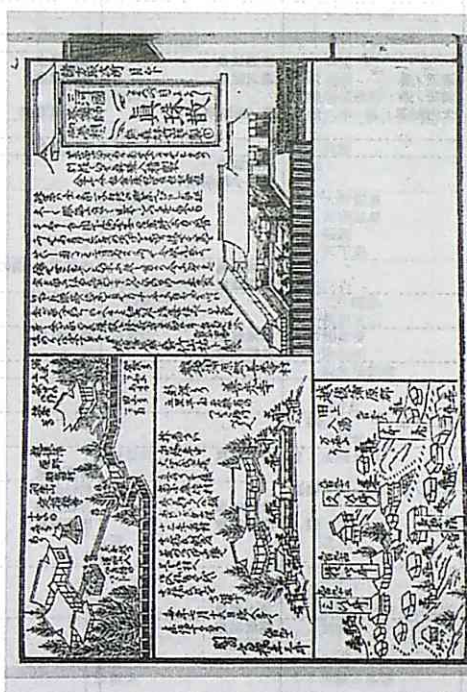
関連資料 (温泉について記述してある市町村史)

- 関川村村史編纂委員会 (1992) 関川村史 関川村.
豊浦町史 (1987) 豊浦町史 豊浦町.
岩室村史編纂委員会 (1974) 岩室村史 岩室村.
湯沢町史編集委員会 (1978) 湯沢町史 湯沢町教育委員会.
松之山町史編さん委員会 (1991) 松之山町史 松之山町.
妙高村史編集委員会 (1994) 妙高村史 妙高村.
妙高高原町史編集委員会 (1986) 妙高高原町史 妙高高原町.

県博本三十四丁裏



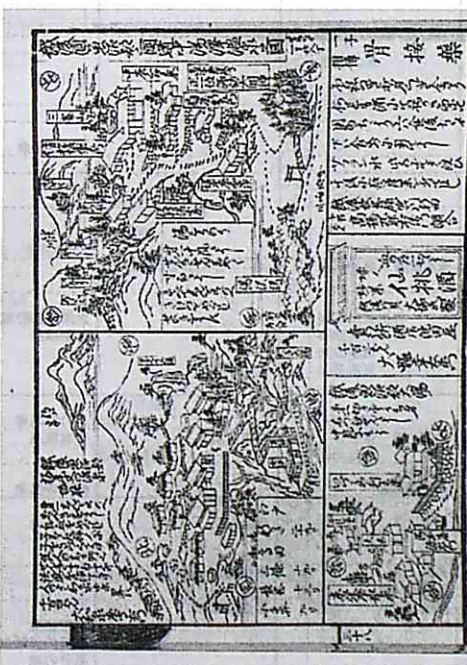
県図本三十四丁裏



県博本三十八丁表



県図本三十八丁表



「東講商人鑑」の岩室・湯田上温泉 (34丁裏) と大湯・湯沢温泉 (38丁表) の部分
渡部 (2000) : 新潟県立歴史博物館研究紀要, Vol. 1より転載

表.1 新潟県の温泉

15	越後新集 文政13年 1830年	52	日本温泉誌 明治19年 1886年	58	温泉の越後 昭和11年 1936年	80	新潟県の温泉 昭和57年 1982年	150	新潟県ホームページ 平成15年 2003年	263
									湯火 勝木ゆり花 湯出 朝日まぼろば	
	湯沢ノ湯 雲母ノ湯 大内湯	温 熱 熱	高瀬温泉 湯沢温泉 貝ノ脇温泉		高瀬温泉 湯沢温泉 鷹之巣温泉		高瀬 湯沢 雲母 鷹之巣	2 1 4 2	湯沢(湯～む) 湯波	
			上籠温泉 新保小路温泉		湯波温泉		湯波	11	湯波	
			滝谷温泉 赤谷温泉		赤谷温泉(湯の平)		川東 二王子	1 1	川東 二王子 城山 新発田(あやめ)	
			探地温泉 並機温泉		笹山温泉		榑ヶ橋 胎内 村松浜	1 1 12	榑ヶ橋 新胎内 村松浜(西方の湯・塩の湯) 霧雲寺(雲雲の里)	
	東三ヶ山	冷					貝屋	1	貝屋 琥珀の湯	
唐	村杉ノ湯 出湯	微 温	月岡温泉 今板温泉 出湯温泉		月岡温泉 村杉温泉 今板温泉 出湯温泉		月岡 村杉 今板 出湯 真光寺山	2 1 1 5 1	月岡 村杉 出湯 真光寺 ケイマン 宝珠	
			葦水温泉 間瀬温泉 俣柳温泉				安田 葦水	1 1		
					越立温泉 新津温泉 高坪温泉		阿賀浜 新潟ビーチ温泉センター 越立温泉 新津 高坪	1 2 1 1 1	阿賀浜 水道町 坂井東 越立 新津 高坪 新津観音	
			論瀬温泉				咲花 日光寺 白根	4 1 1	咲花 馬下 日光寺 白根 一ツ石 戸隠	
					三川温泉		牧ノ花 三川温泉	1 1	新三川(you and 湯) 牧ノ花 三川温泉組合 阿賀高原 吉津	
					湯の浦温泉		角神 きりん山 津川カントリー 津川	2 4 1 1	角神 麒麟山 鹿瀬 津川カントリー 津川	
	天ヶ沢湯						小出(湯の瀬) 御神楽	1 1	御神楽 七瀬の湯	
			大瀧原温泉		大瀧(亀徳)温泉 金割温泉		亀徳 金割 高砂(大瀧原)	1 1 1	大沢 村松(小面谷) 金割 丸山 高砂 さくらんど 福寿(じよんのび蔵)	
唐	岩室ノ湯	冷	岩室温泉		湯の越温泉 岩室温泉		湯之屋 岩室	1 2	湯之屋 岩室 間瀬田ノ湯	
唐	龍ノ湯 観音寺ノ湯	冷 冷			観音寺温泉		弥彦・観音寺 新潟田上	2 1	弥彦 新潟田上	
唐	田上ノ湯		田上温泉		田上温泉		田上	1	田上 ごまどう 田上ごまどう 長崎(てまりの湯)	
	長崎ノ湯 長福寺ノ湯 妙法寺湯	冷 冷	長崎温泉 妙法寺温泉							
	長崎ノ湯	冷			麻布温泉 朝日の湯温泉 坂井の湯		本成寺	1		
							長崎	1	アバ東三条駅	

	越後温泉	越後温泉	日本温泉誌	温泉の越後	新潟県の温泉	新潟県ホームページ
栄町		吉野屋ノ湯 冷 矢田湯 冷 北方ノ湯 冷	矢田温泉 北清温泉	矢田温泉(蟹の湯) 鷹の湯温泉		矢田 ポエムの湯
下田村	芦ヶ平			下田温泉 八木温泉	福岡(砥沢の湯) 1 越後長野 1	中浦 湯沢 越後長野 八木ヶ鼻(いい湯らてい)
見附市		見附ノ湯 冷	湯ノ沢温泉(田井)	名木野温泉	見附 1	見附
栃尾市				苜蓿温泉	大野温泉 1 苜蓿温泉 1	大野温泉 苜蓿温泉 長尾 天下鳥
長岡市		長岡湯 冷 乙吉湯 町田ノ湯 冷 湯沢ノ湯 冷 宮本ノ湯 後谷ノ湯	成願寺温泉 吉水温泉 片平温泉	成願寺温泉 湯澤温泉 六日市の温泉 蓬平温泉 高瀬温泉 五軒の湯温泉 三島谷温泉	長岡温泉センター 1 三ツ郷屋 1 長岡東山(桂) 1 越後東山 1 鶴ヶ丘 1 沢根 1 越後長岡 3 かまぶろ 渡沢 1 蓬平 2 宮本 1 三島谷 1	三ツ郷屋 長岡東山 加津保 麻生田 麻生田観音 鶴ヶ丘 沢根 成願寺 越後長岡 長岡かまぶろ 渡沢 蓬平 寺宝 高瀬(アクアレー長岡) 関原 宮本 大積三島谷
寺泊町				寺泊温泉	弘誓温泉・のぞみ 1 寺泊 1 寺泊海岸 2	寺泊(年友温泉) 金山 寺泊海岸 両高
和島村 与板町					馬越 1	馬越
三島町	与板 居	堀ノ井			小木ノ城 1 七日市 1	
出雲崎町		吉崎湯		石地温泉	勝見 1	勝見 立石
越路町		西谷ノ湯 冷 岩田ノ湯 冷寒	寺尾温泉	西谷温泉	はかま 1	はかま
小国町			猿橋温泉 原温泉 山横沢温泉			
柏崎市		妙法寺湯 冷 川内ノ湯 冷	大広田温泉	廣田温泉 金倉温泉 御殿山温泉(赤坂山 後天楼) 鯨波温泉(湯海ホテル)	広田温泉 4 柏崎温泉 2 柏崎簡易年金加入者ホーム 1 池ノ峰 1	広田温泉 柏崎簡易年金加入者ホーム 鯨波松島温泉 柏崎潮風温泉 蟹地温泉 妙見温泉
西山町			湯ノ谷温泉		まつかぜ温泉 1 地藏温泉 1	地藏温泉 大崎温泉 油田温泉
刈羽村				湯谷温泉 赤田温泉	湯之谷温泉 1	
小千谷市		時水ノ湯 冷	奥水カ谷温泉 穉生温泉 時水温泉 桜町温泉 三仏生温泉		小千谷(小栗山) 1	真人 津山 上の湯 三助の湯
				木津の温泉		

	越後温泉	越後温泉	日本温泉誌	温泉の越後	新潟県の温泉	新潟県ホームページ	
大島村 蒲川原村 安塚町					大山	1 大山 一ノ瀬(ゆあみ) 須川(ゆきだるま) しあわせの泉	
牧村					廣羽温泉	1 廣羽温泉 牧村	
柿崎町	栃窪ノ湯	冷	栃窪温泉	川田温泉 栃窪温泉	栃窪	1 栃窪 上下浜 蛭(まるたぎ) 長峰 鶴の浜 慈徳尼の堂 飯田 犬峯	
吉川町							
大湯町 坂倉町					湯の浜	2 湯の浜 慈徳尼の堂 飯田 犬峯	
中郷村 妙高村	関山	関山ノ湯	熱	関山温泉	蒸温泉 関温泉	1 蒸 関 妙高バイナレー 斑尾高原 柳本 柳川	
妙高高原町					新妙高 笹ヶ峯 新笹ヶ峯	1 1 1 新妙高 笹ヶ峯 新笹ヶ峯 杉野沢	
	赤倉ノ湯	熱	赤倉温泉	赤倉・赤倉新温泉 妙高・池の平 虫生・江戸の温泉 上湯谷温泉	赤倉・新赤倉 池の平・妙高 虫生温泉 上湯谷	2 2 1 1 赤倉・新赤倉 池の平・妙高 上湯谷	
上越市					向橋ノ湯	冷 向橋温泉 向橋温泉	1 向橋 神見坂の湯 森取(ゆったりむら) 糠沢の湯 寸分道 野趣美の温泉 矢代温泉 西蒲生田温泉(るぼた館) 加瀬谷温泉
新井市							
名立町				名立温泉			
能生町				横口温泉	鳥道温泉 横口温泉	1 1 横口温泉 新横口温泉 長者温泉 湯の脇温泉	
糸魚川市	栲山湯・栲	温	栲山温泉 小倉山温泉	蓮華温泉 蒲原温泉 栲山温泉 横知温泉 笹倉温泉	蓮華温泉 蒲原温泉 白馬温泉 栲山温泉 笹倉温泉 焼山温泉 山口温泉	5 1 3 2 1 1 糸魚川温泉	
両津市					佐渡住吉・権崎温泉	1 両津 両津秋津(やまきホテル) 佐渡加茂湖温泉	
相川町					平根崎 台ヶ鼻	2 平根崎 相川長手峠 鷹伏(やまきホテル) 大佐渡(ホテル大佐渡) 台ヶ鼻 相川(マリンスブルー相川)	
金井町 新穂村 佐和田町				海上温泉	佐和田 八幡	1 1 新穂海上 佐和田 八幡	
畑野町				吉井温泉		畑野 真野	
真野町 赤泊村 羽茂町 小木町					杉野浦 小木(かもめ荘)	1 1 杉野浦 羽茂 小木(かもめ荘) 小木海岸温泉	

各文献に取り上げられている温泉で同じ箇所を対比させている。
 年号の右側に記入した数字は温泉の総称
 「越後名寄」には裏に記入したものの他に、古志郡雄沢村に雄沢という居風呂が挙げられている
 「越後名寄」の右側に「歴」と記したものは、居風呂となっているもの
 「越後温泉」の右側に記入した「冷・温・熱」は、温度の区分
 「新潟県の温泉」の右側に記入した数字は源泉数